

葬儀歌手 エリー

2142年8月12日横浜。深夜。

ビルに囲まれたベランダに立つ川上聖司（かわかみせいじ）35歳は、日本酒の瓶を開けると、グラスに注いで一気に飲み干し、夜空を見上げた。地上は明るく、星は見えない。

頬に当たる生暖かい風は、微かに海の匂いがする。

携帯電話が鋭い着信音を響かせる。電話に出る聖司。

「はい、川上です」

「聖司か、保護区から戻ったら、予定通りホールツアーが始まる。問題ないな？」

「ああ、だが最後の舞台になるかもしれない」

「どういう意味だ」

「なんとなくそんな気がするだけだ。忘れてくれ」

電話を切る聖司。再び酒を注ぎ、一気に飲み干す。

2142年8月13日横浜。早朝。

キャリーバックを引きずり、横浜駅へ向かう聖司。保護区までは、横浜駅から高崎駅まで電車で2時間、高崎駅からは迎えの車で1時間、片道3時間の短い旅だ。

高崎駅の改札を出ると、迎えに来たはずの竹田正行（たけだまさゆき）19歳が売店で買い物をしている。

メモを見ながら商品をチェックする竹田。

「よし、全部ある」

商品を受け取り、改札を振り向く竹田。壁にもたれて立つ聖司が目に入る。

「聖司さん、もう着いていたんですか！ すいません、今終わりましたから」

「急がなくていい。葬儀までまだ時間がある」

両手に紙袋を抱えて、聖司のキャリーバックに手を伸ばす竹田。

「荷物持ちましょうか？」

「自分で持てる。正行こそ助けが必要なんじゃないか？」

「いいえ、大丈夫です。車は西口の駐車場に止めてあります。行きましょう」

歩き出す竹田。後を追う聖司。

× × ×

車のトランクにキャリーバックを積み込むと、後部座席に乗り込む聖司。

買い物袋をトランクにしまい、運転席に乗り込み竹田。

「出発しますね」

「ああ、今年もよろしく頼むよ」

動き出す車。町の雑踏を抜けて、山道へと入っていく。

「めったに自由区に出ないから、今年もいろいろ頼まれちゃって。もう大変ですよ」

「ご苦労さまだな」

「まあ、小遣い稼ぎになるからいいんですけどね。それより、明雄さんが区長になったって聞きました？」

「ああ、兄から連絡が来た」

「すごいですよねえ～、足に怪我して山に入れなのに。初めてらしいですよ。事務方で区長になった人。それだけすごってことですよ？」

「そうかもしれない」

「明雄さんは謙遜して、怪我してフラフラしていたから区長だった親父に頼まれて雑用を引き受けたらいつの間にか便利に使われるようになったなんていっていますけど、知らないことを仕切るんですから、大変だったと思いますよ」

「父の強いところは全部兄が引き継いだからなあ」

「本当に明雄さんは強い人ですよ。俺も区長目指しているんです！ だから明雄さんが引き受けていた雑用全部、率先して引き受けることにしたんです。だってチャンスがあるかもしれないでしょ？」

「夢があっていいなあ」

「なにっているんですか。聖司さんこそ自由区で成功を収めて、夢を叶えたんじゃないですか。俺、憧れますよ」

「たどり着いた先には何もなかった」

「え？ なんですか？」

「いや、なんでもない。少し寝る」

「分かりました。着いたら起こします」

ドアにもたれて目を閉じる聖司。アクセルを踏み込む竹田。

2142年8月13日故郷。午後。

葬儀は、村中総出で執り行われる。村人たちは、夜の宴の支度など何かしら役目を果たして忙しく働いている。

式の時間が迫ると村と山の境に一つだけある墓の前に集まる。そして、口々に思い出を語り、故人を懐かしむ。

黒装束に正装した聖司が墓の前に立つ。村人たちが一斉に静まり返る。

「それでは今年も歌わせていただきます。みなさん、お聞きください」

深々と一礼する聖司。静寂を切り裂き、第一声を発する。声は空に広がり、村全体を包み込む。歌は高まり、低まり、響き渡る。

村人たちは、音に合わせてさまざまな思い出に包まれていった。聖司が歌い終わると、すすり泣く声が聞こえた。

足を引きずりながら川上明雄（かわかみあきお）40歳が墓の前に立ち、村人たちに語りかけた。

「俺たちはこの国の根っこだ。たとえ枝葉が切られても、根っこさえ無事なら何度でもよみがえる。だから何があっても腐っちゃならねえ。誇りを持って生きなくちゃならねえ」

村人たちから拍手が湧き起こった。

「みなさん、ありがとう。ご存知のように、これは昨年亡くなった俺の親父、川上啓三の口癖です。小さいころからふてくされるたびに言い聞かされました。覚えがある方も多いのではないのでしょうか」

再び拍手が湧き起こる。

「俺は、みんなにすすめられて区長になりました。何もかもが始めてで、皆さんにもご迷惑をかけたことと思います。ほんとすいません」

頭を下げる区長。頑張れと声援が飛ぶ。

「俺は区長という立場に立って、親父たちが残してくれた財産の大きさを始めて実感しました。さまざまな場所で、さまざまな知恵が生きているんです。死んでない。みんな本当に死んでない。そんな風を感じられるのです。この中に閉じこもっているわけじゃない」

区長が一つだけある墓を指差した。

「しかし、語りかける場所としてはここしかないわけで、今日は外から弟の川上聖司を迎えて無事に式を進めることができました。最後に聖司に盛大な拍手をお願いします」

人々の視線が聖司に集まる。鳴り止まない拍手の中、優雅に一礼する聖司。

× × ×

葬儀が終わり、夕方になると、村を守る霊となり帰って来た先祖たちと飲食が始まる。

「相変わらず食べるのが嫌いなのかい？」

立ったまま、手の甲に乗せた塩を舐めながら、杯に注がれた日本酒を飲み干す聖司。

「嫌いなんじゃない。食べたいと思わないだけだ」

隣に立ち、聖司に酒を注ぐ区長。

「俺は自由区を知らない。卒寮してすぐに保護区に戻ったからな。だが自由区ってところは食べる自由のあるところでもあるんだらう。そんなんじゃもったいないな」

「食べる以外にも楽しみはあるさ」

杯を掲げてみせる聖司。

「確かに保護区では好きな時に好きなだけ飲むってわけにはいかないから。そうかもしれないな」

「そんなことより、区長おめでとう。いずれ継ぐと思っていたけどこんなに若いうちになるなんて驚いたよ」

「ありがとう。俺だって驚いたよ。葬儀歌手は聖司が継いでくれたけど、まさか区長を俺が継ぐことになるなんて。ところで母さんにはもう会ったのか？」

「まだだ。あの人も忙しいから」

「料理の責任者の一人だからな。でもまあ聖司が帰るまでには会えるさ」

「なあ兄さん、区長も新しくなったことだし、葬儀歌手も新しくしないか？」

「どういう意味だ？」

「僕は葬儀歌手には向いてない。この村の人間じゃないのだから」

「そんなことないさ。立派に勤めを果たしているじゃないか。第一、聖司が来なくなったら母さんが寂しがるぞ」

「戻ってこられたことが奇跡なんだ。奇跡はずっとは続かない」

「まあ、なんだ。すぐに結論を出す必要はない。ゆっくり考えればいいさ」

立ち去る明雄。残された聖司は、杯に酒を注ぎ、一気に飲み干す。

2142年8月14日故郷。午前。

10時過ぎに起き出し、朝食を食べ損なった聖司は、空腹のまま用意された車の運転席に乗り込む。目的地を隣の村にセットし、スイッチを押す。車が起動し、走り出す。

うねうねと曲がりくねった道を抜けると、田んぼが広がる広い道に出る。

自動走行を切って、ハンドルを握る聖司。アクセルを踏み込み、加速していく。景色はどんどん後ろに過ぎ去る。

さらにアクセルを踏み込む聖司。緊急ブレーキがかかり、停止する車。

ハンドルにうつぶせる聖司。クラクションが鳴り響く。

× × ×

隣の村に着くと、村人たちが玄関に整然と並び一斉に頭を下げた。

車を降りた聖司を、無表情な少年が出迎えた。

「こちらへどうぞ」

先導する少年の後を追う聖司。質素なソファの並ぶ応接室に案内される。

「こちらでお待ちください。飲み物を用意します。ブラックコーヒーでしたね？」

「ええ、ありがとうございます」

ソファに腰掛ける聖司。テーブルにコーヒーを置き、部屋を出て行く少年。一人残される聖司。コーヒーを一口含むと発声練習を始める。

× × ×

葬儀は、滞りなく執り行われた。誰もが聖司の歌に聞き入った。

夕方になり霊との交流が始まると、聖司は守山樹（もりやまいつき）78歳の食卓に招待された。

「さあ、座ってください」

聖司が席に着くと、お盆に盛られた食事が運ばれてくる。ご飯は玄米、味噌汁は茄子の赤味噌、おかずはキュウリの酢漬け、カボチャの煮つけ、カットしたトマトという質素な内容だった。

「収穫を祝い、先祖とともにする食事です。少しでも手をつけてください」

「僕は食事は」

「分かっています。それでも先祖との仲を取り持っていたいただいた川上さんに食べていただきたいのです。どうか少しだけでも召し上がってください」

箸を手を持ち、カボチャを口にする聖司。

「ありがとうございます。これで先祖との仲も取り持たれたことでしょう」

手を叩く守山。少女が入ってきて、聖司の前に酒を置き去る。

「川上さんはこちらのほうが好きなのでしょうか。どうぞ、召し上がってください」

杯に酒を注ぐ守山。一気に飲み干す聖司。

「あなたは自由区の人だ。我慢することはない。しかし、わたしたちはちがう。耐えなければならない。忍耐こそが美德だ。そう思いませんか？」

「僕には分かりません」

「保護区は、弱者を保護するためにあるわけじゃない。自然を育み育てるためにある。だから自然にとって有害なことはやめなければならない。たとえば、シャンプー。あれは水を汚す。村人が一斉に洗えば、浄化槽を破壊してしまう。だからといって、一部だけ許せば不公平になってしまう。そういうときは、みんなで我慢するに限る。そうは思いませんか？」

「洗わないんですか？」

「合成洗剤を使わないだけで、自然のものを使って洗います」

「保護区もいろいろ大変なんですね」

「先祖から受け継いだ自然を守るためです。たいしたことじゃない」

「僕は保護区を捨てた人間です」

「それは先祖とのつながりも捨てたということですか？」

「そうかもしれません。僕が死んでも、村を守る霊にはならないでしょうから」

「わたしはつながりを信じている。だから安心して生きることができる。死ぬことは少しも怖くない。ただ」

「为什么呢？」

「生きているもののことが心配でならない。わたしが死んだら、彼らはどうなるだろう。ちゃんと決まりを守って生きていけるだろうか」

「信じられないんですか？」

「そうじゃない。いや、そうかもしれない。死を意識するほど、残していくもののことが気になってしかたがないのだ。わかるかね？」

「この村を愛してらっしゃるんですね」

「そうだ。開拓時代から知っているわたしにとって、この村はわたしの全てだ。離れることはできない」

「死ぬことが怖いのですか？」

「違う。心配なだけだ。怖くなどない」

「でも残していかなければなりませんね」

「ああそうだ。川上さんは何を思って歌うんだ。合同葬儀をどう思う？」

「僕は死後の世界を信じていません。でも、亡くなった人たちに会いたいと思います。ただただ懐かしい。思慕の気持ちを歌に込めて歌っています」

「死んだら山に帰り、村を守るという話を信じていないのか？」

「僕はこここの人間ではありませんから、その流れの中にはいません。でも、守山さんたちは流れ

の中にいます」

「そうだ。わたしたちは美しい物語の中で生きている。生きている。生きているんだ」
一点を見つめる守山。黙って見守る聖司。

「つい興奮してしまった。すまなかった。さあ、ゆっくり飲んでください」
杯に酒を注ぐ守山。

「これを飲んだら、失礼させていただきます」

「今日はどうもありがとうございます。また来年もよろしく頼むよ」

「来年のことはなんとも言えませんが、こちらこそありがとうございます」
握手をして別れる聖司と守山。

× × ×

夕暮れの中、車の運転をする聖司。

ボツボツとフロントガラスに雨粒が当たる。雨はだんだん激しくなり、やがてザーザーと音を立てて降り始める。

車を止めて窓の外を眺める聖司。水煙で曇った景色は、ぼんやりとにじんで見えた。

× × ×

日が落ちてから故郷に着いた聖司は、センターの客間に急ぐ。

扉を開けると、明かりが漏れてきた。応接間に川上泰子（かわかみやすこ）62歳が座っていた。

「おかえりなさい。つかれたでしょう？」

梅干入りの緑茶を差し出す泰子。

「また食べてないんだろう？ せめてこれを飲みなさい」

キャリーバックを空けて、包みを取り出す聖司。

「母さん、これ」

包みを開きながら聖司に話す泰子。

「聖司が来てくれるようになって、またこの香水を楽しむことができるようになった。通販では手に入らない香水だから嬉しいよ」

「特別な思い出でもあるの？」

「この匂い、父さんも好きだったんだよ。よくデートの時につけていた」

「保護区のデートってどこですか？」

「公認になればお互いの家に行けるけど、付き合い始めは山の中に自分たちだけの特別な場所を見つけてこっそり会ったのさ。雨が降り続いたら会えない。でも晴れたら仕事が忙しい。悩ましいところだよ。今日みたいな夕立が降ると昔を思い出すね」

黙ったまま微笑みあう聖司と泰子。

2142年8月15日故郷。午前。

太陽を浴びながら、車の後部座席に座る聖司。運転席に座る竹田。

「正行が来てくれて助かるよ」

「今年のコンテストはどんな料理がでるんでしょうね。楽しみですね」

走り出す車。

× × ×

昼前に到着した聖司は、無事に歌い終える。

葬儀が終わると、料理コンテストが始まる。村のあちこちにテントが立ち、美味しそうな湯気が立ち上る。あっちこっちで人だかりができて、歓声が上がる。

「どうぞ、食べてってください！」

テントの前を通り過ぎる人々に向かって、少女が声をかける。

テントの中をのぞく竹田。鍋の中には、茄子、カボチャ、オクラ、干しいたけ、豚肉の団子汁がフツフツと煮立っている。

「団子汁か」

通り過ぎる竹田。がっかりする少女。

「1杯ください」

白井今日子（しらいきょうこ）26歳が少女に声をかける。

「今日子さん！ありがとうございます」

大きくうなずき、団子汁を差し出す少女。

「美味しくできているよ。栄養面も申し分ない。でもねえ、華が無いんだよね。コンテストなんだからもっと意外性が無くちゃ」

「そうなんです。わたしが一番好きな料理を作ったんだけど、いつでも食べられるからって、誰も食べてくれなくて。一人も食べてくれなかったらどうしようって思っていたところなんです。

本当にありがとう」

「そうだ、聖司も食べなさいよ。故郷の味なんて懐かしいでしょ？」

聖司の腕をつかむ今日子。

「僕は食事は」

「さっきから見えていたら酒を飲んでばかりで、全然食べてないじゃない。体に悪いよ。人助けだと思って食べてあげなよ。味はわたしが保証する」

「食べたくないんだ」

「何を言っているのよ。帰って来た先祖の霊と飲食をともにするためのコンテストなんだ。食べなくちゃだめだろう」

「僕は保護区の間人じゃない」

「そうだったね。神妙な顔して歌なんて歌っているけど、本当は先祖の霊なんて信じてないんじゃないの？」

「そうだ。信じられない」

「やっぱりそうなんだ。でも儀式なんてお芝居みたいなものでしょう。そう信じたいからみんな嘘を演じている。だから聖司が本当は信じていなくて問題ないわよ。楽しめばいいの。いえ、楽しかったわ。聖司の歌を聞いていたら、なぜか亡くなったおばあちゃんの顔が浮かんで

きてすごく懐かしかったもの。歌の力ってすごいって思った。葬儀歌手って素敵な仕事よね」

「下げたり、上げたり、相変わらず忙しい人だ」

「思ったことをポンポン言っちゃう性格なのよ。深い意味はないわ」

「分かっている。ちょっとうらやましいよ」

今日子に背を向ける聖司。

「なあに？ なにか隠していることでもあるの？ 言いたいことがあるならいいなさいよ。聞いてあげるから」

「別に何も無いよ。もう一人にしておいてくれ」

「当ててあげましょうか？ そうねえ、葬儀歌手をやめたい。いいえ、歌手をやめたい。そんなところでしょう？」

動きを止める聖司。

「どうしてそう思う？」

「人が悩むことなんてそんなに多くはないわ。深刻なら深刻なほど、問題は限られてくる。わかるのよ。わ・た・し・には」

立てた指を唇に押し当て、意味ありげに笑いかける今日子。今日子の仕草につられて苦笑いする聖司。

少女に、一杯くれるようにジェスチャーする今日子。受け取った団子汁を聖司に差し出す。

「食べてごらんさい。作る料理は地味だけど、腕が一番なんだから、絶対美味しい」

団子汁を受け取り、口をつける聖司。やさしい味が口いっぱい広がる。

「美味しいでしょ？」

黙って食べ続ける聖司。

「やめたって何にもすることないんだから、続けなさいよ。歌えなくなってからやめたって遅くは無いわ」

黙ってうなづく聖司。

× × ×

聖司と竹田を乗せた車が、深夜の田んぼ道を走る。

「ちょっと止めてくれ」

後部座席から降りる聖司。見上げると空一面に星が輝いている。

2142年8月16日故郷。早朝。

荷物をトランクに積み込む聖司。見送る明雄。

「今度休みが取れたら、聖司の舞台を見に行くよ」

「無理しなくてもいいよ。でも来るならチケットを用意するから言って」

明雄と握手し、後部座席に乗り込む聖司。

× × ×

夜になり、ステージ脇に立つ聖司。

「やっぱり葬儀歌手を続けることにした。歌手も」

「そうか、そうだなあ、それがいいかもな」

「ああ、歌うことが僕の仕事だから」

歓声の聞こえる舞台に出て行く聖司。